

会報三月号 誓願・信条の構築（一）

目次

- ・ 生命の法則
- ・ 無私の為に
- ・ 誓願と信条の構築
- ・ 生命燃焼の八側面
- ・ 葉隠聞書
- ・ 葉隠から会得したこと

● 生命の法則

私たちを取り巻く世界は広い。そして世界は、人間を超える大自然の摂理や物事の道理、宇宙の秩序や生命の法則に抱かれている。生命の法則とは例えば、「個体の保持」「種の繁殖」「精神の発達」である。これら三つはいずれも法則なので、どれか一つをしっかりとやればよいというものではない。三つのうちのどれかが欠ければ、そこにどんな理由や信念があろうとも、その生命は衰退し滅んでいく。自然はその人の信念や理由を忖度してはくれない。それが自然の法則というものである。

そういう法則や秩序の下で、人間としての自覚を以て自分の運命を生きる。新年度を前にして心を新たにしておきたい。

● 無私の為に

自分の運命を生き切る為に最も大切なことは、「無私（私心の無いこと）」であると思ふ。もちろん、それが誰にとっても絶対というわけではないだろう。私には、私の生き方の美学や理想があり、それを志向したいという感性がある。

自分の運命を生き切る為に、その土台となる宇宙観・生命観・人間観・死生観・仕事観・文明観等を、学問や芸術や歴史や文化や経験や観察や思考や感性等から構築してきた。その上で、自分を生き切るために必須だと自得した最たるものが「無私」である。自分を臆病にするのも怠惰にするのも卑怯にするのも、親しむべき人達と仲良くできないのも、結局のところ小賢しい欲心があるからである。この欲心を斬り捨てて無私となければ、自分を生きることができない。

私心・欲心を斬り捨て、無私となって物事に死に狂いの体当たりしていくにはどう

すればいいのか。自分で自分を誘導していけばいいのである。そこで枷になるのが、「私欲を満たすことが良い、そこまで我慢する必要はない」という甘い価値観と、小賢しい私利私欲である。まずはこの枷を自覚する為に、自分を見つめる独りの時間が必要である。その時間の中で自分と対話する。自分の理想や美学に反し、ただ欲心を満たそうとしていないか、そういう浅ましい自分を放置していないか反省するのだ。その為には、自分の美学や理想を具体的な言葉に置き換えた誓願や信条が必要である。自分を修正するためには、どこに向かって修正するか自覚すべきであると考えらるから。誓願や信条を航海の灯台とするのである。自分の理想や美学となる「誓願」や「信条」を言葉にすると、どんな言葉で表すことがしっくりくるのか：。

西郷隆盛は佐藤一斎の「言志四録」から百一条を抜き出して座右の箴としていた。このやり方を真似てみたいと思った。私の肚の中にも古典がおさまっている（腹中書有）からだ。

私が好きな本は何か。「論語」「孟子」「大学」「中庸」「易経」「言志四録」「菜根譚」「醉古堂劍掃」「古事記」等沢山あるが、どれも深い真理であって、その言葉や概念に心が動くかと自らに問えば、それは慎重に扱うべきと答えが返ってくる。自己を逍遙の後、最も身近にあった本について忘れていたことに気付いた。忘れていたというより、身近にあり過ぎて意識していなかったのだ。その本とは「葉隠」である。江戸時代中期、九州佐賀鍋島藩士である山本常朝が武士としての心得を口述し、田代陣基が筆録して全十一巻にまとめたものである。葉隠は正確には「葉隠聞書」と言う。現代はこの「葉隠」をビジネスマンの処世術という単なるノウハウ本としてリメイクしているが、何でも理屈で捉えようとする浅はかな解釈である。「葉隠」とは、山本常朝の魂であり、武士としての自分の運命を愛し、自分を生き切るという覚悟であり、崇高さの美学である。

葉隠聞書の構成は以下のようになっている。

- ・ 聞書第一、第二↓山本常朝自身の教訓
- ・ 聞書第三、第四、第五↓佐賀藩主 鍋島直茂、勝茂、光茂、綱茂等の言行
- ・ 第六、第七、第八、第九↓佐賀藩のこと、佐賀藩士の言行
- ・ 第十↓他国の武士の言行その為
- ・ 第十一↓前十巻の補遺

●誓願と信条の構築

「葉隠」は、その千三百余りのエピソード等を通じて、武士道を浮き彫りにしている。私にとってこの本の良い所は、カッコいい言葉、明確な言葉を拾うことができる点にある。体系としてまとまっているわけではないが、私の考える生命燃焼の八側面に自分で配置し直すことができるので却って良い。生命燃焼の各側面に葉隠の言葉を再配置できてしまうという事は、山本常朝の宇宙観・生命観・人間観・死生観・仕事観等は、私のそれと親和性があるということだ。もし違うなら、再配置することは

叶わないだろう。彼の感性の波長を私は受け取ることが出来る。そして何より、彼の魂は人間として偉大である。彼の魂の波長を私は受け取って自己化したいと願っている。葉隠の言葉をメインに誓願や信条が構築できるとするのは願ってもないことである。

●生命燃焼の八側面

生命燃焼の八側面とは、生命を燃焼させるためのプロセスのようなものである。それは、以下のような思考に基づいている。

人間は生命であり、その生命は宇宙の中で生まれた。人間の本質は生命の本質に繋がりが、生命の本質は宇宙の本質に繋がっている。だから人間は、宇宙と生命の掟・秩序・法則に制約される。その制約は人間を人間たらしめるものであり、人間としての自由を奪うものではない。従って、生命の法則や大自然の摂理や秩序、道理を重んじることが大前提である。

宇宙の働きとは、自己を実現しようとする絶対者（宇宙）の無限の努力である。それを「造化」と言う。造化のエネルギーとはたらきが万物を生成化育し、万物を生成流転させている。

これが自覚できるのは、我々が人間だからである。その自覚と覚悟を決めれば、生命の目的は「造化の為の生命燃焼」だと分かる。それは、自己以外の「何ものか」の為に己の命を捧げ尽くすことであり、己の「勇知仁、真善美、誠、愛」の地上における具現化である。これが「人間として生きる」ことの内実である。言い換えれば、生命の目的は、人間として死ぬまで生きる（生命を燃焼させ尽くす）ことである。

その為には、不断の自己反省や自己革命が必要である。それは循環・還元の道筋を辿りながら、螺旋のように進歩向上していく。どこまでも魂を磨く。これが宇宙の造化の実相である。

宇宙を仰げば、そこに宇宙の初心と理想はある。人類の初心と理想も同じ。己の宿命と運命を丸ごと包容し、己の使命を知り（知命）、己の命を立て（立命）、それを生命を賭して具現化していくのが人の道である。「中庸」は「誠は天の道也。之を誠にするは人の道也」と説く。同じことである。その為の実践哲学が「葉隠」なのである。

閑話休題。自己以外の「何ものか」の為に、死に狂いの体当たりで突進する。その生きる姿勢にこそ魂の躍動があり、そこにこそ価値がある。結果を問うのではない。必死で戦う姿勢であってこそ、人間の生命は燃焼するのである。繰り返すが、その為の実践哲学が「葉隠」である。この生命燃焼のプロセスを、八側面として以下に整理しておく。この八側面に「葉隠」の言葉を配置し直すことで、信条作りの一助とするのである。

①道／造化への帰依↓人間の義より上に道はある。道を外して生命を燃焼させることはできない。だから、道を自覚し、道へ帰依することは生命燃焼の大前提となる。

②自立自尊の覚悟↓生命を燃焼させるには主体性創造性が必要である。それは、自律自尊・孤独・慎独という覚悟が必要である。自分という存在はこの宇宙に唯独りだけであるという自覚と、自分の運命を生きるという覚悟無しには生命を燃焼し尽くすことなどできはしない。

③生命燃焼の自覚↓生命を侮ってはいけない。生命は「生きよう」とする。何かあったときに弱気になるというのは、生命を侮っているのだ。弱気や怠惰や卑怯な態度で生命を燃焼させることなどできはしない。

④勇知仁の断行↓何に向かって生命を燃焼させるのか。人間の使命は「己の勇知仁・信念・愛・誠の断行、具現化」なのだから、命懸けの体当たりで物事に取り組むのである。

⑤崇高さを目指す美学↓真善美や愛、憧れや理想というものは、理屈で到達できるものではない。研ぎ澄まされた直観が必要であり、崇高なものを目指して弛まぬ鍛錬が必要である。

⑥判断基準↓形の無い精神と共に形のある肉体を纏う人間は、本質的に矛盾対立する方向の要求を持っている。つまり、苦悩や葛藤を抱くのは人間の証なのである。しかし、問題に対しては、悩みながらも一刀両断して決めなければ先へ進めない。その判断の基準が私利私欲に偏っていては、却って生命燃焼を妨げてしまう。つまり、「無私」で在ることができずかできないか。私欲を立てず、道に適った判断ができるか。その一助としての判断基準を持つておくことは大切である。

⑦永遠の自己革命↓人間の本体は魂である。魂（心、精神）の成長・発達は、ここで終わりということはない。一つの区切りとして「死ぬまで」自己を成長させていくべきである。だから、本来「道を極めた」ということは存在しえないのである。道とは続いているから道なのであって、「極めた」としたら行き止まりである。行き止まりは道ではない。行き止まりが無いから道なのである。人の道も然り。ここで終わりということはないのである。

成長や発展は、循環（螺旋）の形をとって、どこまでも続いていく。この生命燃焼のプロセス（八側面）も然り。従って、また①道／造化への帰依へと戻り、そこから②自立自尊の覚悟を新たにし、③生命燃焼の自覚を新たにし、④勇知仁の断行を新たにし、何処までも循環して自分で自分を高めへと運んでいく。

⑧先人の魂／エール↓意気消沈している場合ではないが、そういう時もあるだろう。そんなとき、偉大な先人からのエールの言葉は自分を励ましてくれるに違いない。

●葉隠聞書

信条作りに役立ちそうな「葉隠」の言葉を全十一巻から抜き出す。

△序文△

・同じ人間が誰に劣り申そうか。修行は大高慢でなければ役に立ちませぬ。
・四誓願

- 一、武士道において後れを取り申すまじきこと。
- 一、主君の御用に立つべきこと。
- 一、親に孝行いたすべきこと。
- 一、大慈悲を起こし人の為になるべきこと。

△葉隠聞書一△

一〇二 武士道とは死ぬことと見つけたり。二つ二つの場にて早く死ぬ方に片付くばかりなり。「凶に当たらぬは犬死」などと云事は上方風の打ち上りたる武道なるべし。犬死氣違ひにて恥にはならず。毎朝毎夕改めては死に改めては死ぬ。常住死身、一五、一〇私欲を立てない、一〇六弁えのある若者は誉めて伸ばす、一〇九四請願の磨き上げは武士道において遅れをとるな。あらゆる人を役に立つように、一二四少々見逃せ、一二六損得、一三四人に任せることの中庸、一三五低い目の戒め、一三〇男の引き締め、一三〇初めが大切、一三九無念は正念、一四二世界は皆からくり人形也、一四四一〇四義より上に道はある↓高段の智慧、一四五修行の順序、一四六大事の思案は軽くすべし、一四七聖は非を知る↓道とは我が非を知りそれを改めること、一五五仕返し覚悟、一五六人が受け入れることの大切さ、一五七まず礼儀正しいことが美しい、一五八人に生まれた僥倖、一六〇数箇条、一六一人としての肝要は「正念」、一六三日常振舞いの覚悟、一六七忍耐とスピード 胸が据わる、一七三一八三勇に進みてものに勝ちて浮かぶ心↓人の気持ちを引き立てる、一七九大雨の戒め、一八二基本が奥義、一八四先手必勝、一八五子供の育て方、一八〇覚悟の薄い人、一八九鏡↓閑かに強みあるがよい、一九〇人のことははっきり言わないこと、一九一格を離れた姿がある(守破離)、一九二最終的な覚悟の自覚、一九八分別は四請願に引き当てる、二〇一勘定者はすくたるる、二〇三武士道は死狂い↓忠孝はその中に含まれる、二〇二七息思案、二〇五父子兄弟仲悪しきは欲心より起る、二〇三二曲者は頼もしき者なり、二〇三六義の上にある道の慈悲、二〇三九ものが二つに成るが悪しき也、二〇四一、四二、四三勇猛と信念、二〇四五士は外目を嗜み内は費えなき様に、二〇四六役に立たぬ芸能の上手、二〇四七諫言を聴く、二〇四九人と相応する、二〇五二どんな意見も聴く、二〇六一、六二誰にも劣るまい、二〇六三一和天道、二〇六四何事も人より一段立上がりて見ねばならず、二〇六九本筋をさえ踏み外さぬ様に、二〇七三ものを読むには腹にて読みたるがよし、二〇七四自慢と奢り、二〇七八大気は大慈悲、二〇八〇情は一生一人のものなり、二〇八三良き事は苦痛に耐えること、二〇八九無二無三、二〇九一人を立てるが士の義理、二〇九六先祖の善悪は子孫の受け取り方次第、二〇九七理屈をつけては道が立たない、二〇〇〇自慢と奢り、二〇〇二知れることは浅いこと。

△葉隠聞書二△

二〇一 大酒 自慢 奢りは禁物。不合せの時草臥るる者は益に立たざるなり、二〇二 忍ぶ恋、

2-4 相手の気質に応じる、2-6 夢、2-7 知仁勇、2-12 励まし方、2-18 人／世の気質に
応じて応対、2-17、2-20 一念一念と重ねて一生、2-18 時代の風、2-19 根本に立ち返る、
2-22 死に狂い、2-27 日頃の心掛けが死後にまで顕れる、2-31 色即是空／空即是色、
2-35 場を外さぬよう、2-37 遠慮、2-44 からくり人形、2-47 只今がその時 その時が只
今、2-52 武勇の為怨霊悪鬼とならんと大悪念を起こしたらば首の落ちたるとして死ぬ筈
にてはなし、2-56 諸行無常、2-79 神仏を敬す、2-81 2-118 神は穢れを嫌う、2-85 好き
なことをして暮らす、2-89 威厳、2-90 知仁勇、2-103 修行、2-106 何事も実、2-110 遅
れ 不相応 私欲人の害、2-120 意地の内外、2-121 是非の沙汰、2-126 軽い事は一喝、
2-130 つつまでもつつまでも、2-138 無用のものもやり尽くせ。

△葉隠聞書三△

3-7 花はよくありませぬが立てぶりは見事、3-14 当時気味良き事は必ず後に悔やむこ
と有る事なり、3-41 我気に入らぬ事が我為に成るもの也、3-49 油断すれば必ず落度有
るもの也、3-53 一方よければ一方はわろし。

△葉隠聞書四△

4-8 臆病魂が一つ足り申しませぬ、4-25 家中によい者が出て来ますよう、4-50 急急
急だからだり急だからだり、4-52 いつもの通り、4-53 作法 容儀 氣勢、4-55 人
を好きになれば人は集まる↓誠でないに役には立たない、4-67 国家のことが一言も見
えない。

△葉隠聞書五△

5-11 畳の上に座し候心持ちにて候えば草臥れ申さず候、5-138 元々更に事無く迷へば
則ち凡夫と云うべし。

△葉隠聞書六△

6-1 我と他を分ける心が解けると自意識もなくて無自性であった、6-19 勇智兼備して
慈悲深し、6-21 武士たる者は忠と孝とを片荷にし勇氣と慈悲とを片荷にして二六時中
肩の割入るほど荷ふてさへ居れば侍は立つなり、6-63 寝られぬ時は寝ず寝られる時寝
る食はれぬ時は食わず食はるる時食ふ。情け容赦なく物事を覆すのでそれでは人の
ためにならない。

△葉隠聞書七△

7-1 自分に勝つというのは気を以て体に勝つこと。自分に追隨できる者がいないように
心身を訓練しておかねば敵に勝つ事はできない、7-40 勇氣を嗜みなさい↓cf. 七転びハ
起き 達磨大師、7-43 急急 急だからだり急だからだり↓cf. 4-50、7-46 気味を
くさらかす事有りこれが悪しき也。

〈葉隠聞書八〉

8-20 一日の仕事ならばどうも堪えるべし翌日もまた一日也、8-37湯の機転、8-43人の身に大切なのは気概である 命などは散ってゆくものである、8-49これしきの傷が痛いのですか、8-66家老という者は主人に家中の者の心が向かいますようにするもの、8-71奉公人の覚悟は三次第↓御意次第 精次第(熱心に励む) 死に次第、8-78何事も身を尽くして、8-82致す者がおられませんかなら某が致そう。

〈葉隠聞書九〉

9-3見かけより弱い、9-7鎧武者の首の取り様は斯様に仕り候、9-36世が末になったからといって人々が思いを腐らせ精を出さぬのは無念な事 世に咎はない、9-39見苦しき死をめされては無念の事。

〈葉隠聞書十〉

10-2 因縁性、10-8 礼儀の大意始め終わりは早く中は静かに、10-16 寝めるは損なう、10-21 気持ちを静めさせる為の嘘、10-56 何事も皆偽りの世の中に 死ぬるばかりぞ誠なりける 常住死人成りたるを 誠の道に叶ひたると云う也、10-58 惜しみても帰らぬはもとの水 流れはよも尽きじ 絶やさぬぞ 手向けなりける、10-59 名人は難に臨み候て滞みなきもの也、10-63 武士道を 相守り候て 大切の一命を捨て申し候、10-66 他力を借らず自力を頼らず前念と後ろ 念とを裁断しその時の意に留まらなければ大いなる道が現れる、10-70「易」は変わる、10-73 犬と猿の違いに意味がある、10-77 目は人の眼也、10-84 本心に分別が付きたる時臆病者になり候、10-90 千羽の中に入りてもはじめに見込みたる一羽の鳥ならば目は付けぬもの也、10-91 心を静める、10-95 士の一言金鉄よりも堅し、10-102 功者の武士は抜かぬ太刀の功者、10-113 天下を取ることには得意である、10-117 あればある なければないとするがよい 苦の無き神の宮移りだな、10-121 士は不義を以て恥とす、10-133 墨継ぎは口上の息継ぎの如く也、10-137 争いとは何事も相談、10-143 天下を取るには大気 勇氣 智慧がなければならぬ、10-144 心配り、10-146 人の中を避けて引っ込んでいるのは臆病者である、10-161 歎かじな悦びもせじとにかく昨日は今日の昔なりけり。

〈葉隠聞書十一〉

11-1 始勝後戦(兼勝)、11-2 前疑いは臆病の本、11-3 心掛けが浅いと狼狽える、11-5 甲の事、11-6 善悪思わざる所善し、11-10 口論の時心持の事、11-22 骨一つにて澄む也、11-34 用心の座敷のこと、11-40 後悔の事、11-45 兵法は身を捨てて打つべし、11-46 黒く見え強く白く見え弱い、11-47 生死を離るべき事、11-52 心を静むる事唾呑み也、11-63 油断すべからざる、11-69 申し違ふとも幾度も云い直すべし、11-87 兼ねて覚悟したる者はその時一番に出る、11-111 武士は命を惜しまぬに極まりたり、11-132 必

死の観念一日仕切りなるべし、仕限りに成すべし、二一三三皆が寝静まった後に計画を立てる、二一三五大願力、二一三六ものには相応・不相応有り、二一三八覚悟なくすればかえって仇になる、二一四〇人は立ち上がる所がなければものならず、二一四二逆(下から上)に突く、二一四二病人は気を引き立つる事肝要也、二一四五士は難儀の時に手助けするのが義理、二一五〇後手にならぬよう、二一五五フィンガーボール、二一六〇人相応に語る、二一六〇男児は勇氣 女児は貞心(操、水棹)、二一六三道の極みは身養生(早起き)にあり、「一日の計は鶏鳴にあり」↓cf.一年の計は元旦にあり、二一六四与えたことは忘れる、二一六六大きな成果を成す時は細かなことに捉われない。

・信心は心の掃除、人の心を破らぬように(直茂公御壁書二ヶ条)

△その他の葉隠メモ▽

- ・四誓願に押し当て、私なく案ずる時、不思議の智慧も出づるなり(一七)
- ↓必要なのは知識ではない。信念である。
- ・同じ人間が誰に劣り申すべきや(序文)
- ・何ぞ人が人に劣るべきや(一二〇)
- ・彼も人も、鬼神にてはなし、少しも劣るべき謂れ無し(二一四〇)↓手に吹毛の剣を握り触れる所斬り去らぬもの無し!
- ・一念発起すれば則ち立ち上がる事也(二一四〇)
- ・武士道と云うは死ぬ事と見つけたり(一七)
- ・武士は命を惜しまぬに極まりたり(二一三二)
- ・武士たる者は、武勇に大高慢をなし、死狂いの覚悟が肝要也。不断(普段)の心立て、もの云い、身の取廻し、万綺麗にと心掛け嗜むべし(二三九)
- ・一生の仕事は人の為になるばかり。私を立つまじき私の情識を捨て古人の金言を頼む(一六)
- ・諸事人より先に量るべし(一四六)
- ・諸事堪忍の事(一四六)
- ・何の益にも立たず 人に恥をかかせ悪口すると同じ事也(一四)
- ・悪事は我身に被り申すこそ当介にて候(二一六)
- ・内には知仁勇を備えること(2-7.c f2-10「勇知仁」)
- ・「知」↓人に談合するばかり也。量も無き智也。
- ・「仁」↓人の為に成る事也。我と人と比べて人のよき様にするまで也。相手を優先する。
- ・「勇」↓齒噛みなり。前後に心付けず、齒噛みして踏み破るまで也。
- ・外には風躰、口上、手跡なり。常住の稽古にて成る事也。大意は閑かに強み有る様にと心得るべし(2-7)
- ・「風体」↓閑かに強み有る様に。
- ・「口上」↓閑かに強み有る様に。

- ・「手跡」↓閑かに強み有る様に。
 - ・結構者はすり下がり候、強みにてなければならぬもの也(2-11)
 - ↓何よりも勇氣、勇氣、勇氣である。勇氣を出せ!
 - ・詞(ことば)の勢いが武篇の大事なり。詞を掛ける勢いにて仕澄也(2-18)↓言葉で自らを鼓舞する
 - ・人が請け取らねば、如何様のよき人にも本義にあらず(1-56)↓人に好かれる事の大切さ
 - ・まず礼儀正しきこそ美しけれ(1-57)
 - ・人間に生まれ出るのも生々の大幸と存すべき事に候(1-58)↓人間として生まれたという己の運命を愛する
 - ・ものを申し候時は向こうの眼と見合わせて申すべし(1-60)
 - ・兼ねて必死の極め候はば、何しに平生卑しき振舞いあるべきや(1-63)↓死を覚悟して生きるなら、くだらない姿勢で生きるはずはない!
 - ・仕合わせよき時、自慢と奢りが危なき也(1-74)
 - ・よき事は痛さ堪える事也(1-83)
 - ・無二無三(1-89)↓一つに集中/今に集中
 - ・恋の至極は忍ぶ恋と見立て申し候。一生忍んで思い死にする事こそ恋の本意なれ(2-1)↓「志深き淵には音も無しげに騒がしきは浅き物欲」「恋死なん後の煙にそれと知れ終に洩らさぬ内の思いを」
 - ・士たる者は名利の真中・地獄の真中に駆け入りても主君の御用に立つべき事也(2-139)↓敢えて「名利を求めよ」。いつまでも低い地位にいては、大きな仁を成すことは難しい。名利を求めない枯葉のような出家連中は腰抜けである。地獄や修羅場で立つてこそ人間の甲斐があるというもの。
 - ↓「士は名利の真中 地獄の真中に駆け入りても道の御用に立つべし」
 - ・人間一生誠にわずかの事也。好いたる事をして暮らすべき也。夢の間の世の中に好かぬ事ばかりして苦を見て暮らすは愚かなる也(2-85)↓若いうちは誤解するので秘伝
- △生命観▽
- ・勇み進みて戦いに勝って浮かぶ心なり↓戦うことは生命としての自己の運命である。一步も跡へ帰らず直に立ち向かうべし(2-118)
 - ・閑かで強みあるがよし(2-119)恋の至極は惚ぶ恋と見立て申し候)
 - ・「我は日本一」と大高慢にてなければならず。道を修行する今日の事は知非便捨(己の非を知れば、直ちにこれを捨てる)にしくはなし。斯様に二つに分けて心得ねば埒明かず(2-32)↓傲慢と謙虚さ
 - ・「水増されば舟高し」と云う事有り。器量者、または我得方の事は、難しき事に出会うほど一段進む心に成る也(2-42)↓困難に遭遇したら欣喜雀躍してこそ男。
 - ・気力さえ強ければ、詞(ことば)にても身の行いにても道に叶う様に成るもの也

(2-133)を求めよ。下っ端では力不足。

・不仕合せの時草臥るる者は益に立たざるなり(2-1)↓大酒、自慢、奢りの三つが禁物。
・不仕合せの時は氣遣い無し。ちと仕合よき時分、此の三箇条危うきもの也。それ故、人は苦を見たる者ならで根情据わらず。若き内には随分不仕合せ成るがよし。

・しほたれ草臥れたるは疵なり。勇み進みて物に勝ち浮かぶ心でなければ、用に立たざるなり。人をも引き立つる事これあるなり(1-73)

・名人の上を見聞て及ばざると思うは不甲斐なき事也。名人も人也、我も人也(1-10)

・其人の恥に成らぬようにして良き様にすること(1-20)
・「武勇の為怨靈悪鬼とならん」と大悪念を起こしたらば、首の落ちたるとして死ぬはずにて無し(2-52)

・茶の湯の本意は、六根を清くする為也(2-18)↓畢竟、意を清くするところである。
cf. 誠意↓自らを欺かない(大学)

・芸能などは、道に引き入れる縁まで也(1-45)↓全ての物事は、人間を道に引き入れる為の『縁』に過ぎない。

＜宇宙観＞

・義より上に道は有る也(1-44)、格を離れた姿あり

・ものが二つに成るが悪しき也。道の字は同じ事也(1-39)

・道と云うは我が非を知る事也 念々に非を知って一生打ち置かざるを道と云う也(1-47)

・理を付けて道は立たず(1-97)

・世界は皆からくり人形也(1-42→cf. 2-44)

・「身は無相の内より生を受く」と有り。何も無き所が色即是空なり。其何も無き所にて万事を備うるが空即是色なり。二つに成らぬ様に(2-31)

・不定世界の内にて、愁いも悦びも、心を留むべき様なきこと也(2-56)

・当介(あてがい 分相應)を思い、自慢を捨て、我が非を知り、何とすればよきものかと探捉し、一生成就せず探捉仕り、死ぬに極まる也。非を知って探捉するが、則ち取りも直さず道也(2-11)↓死ぬまで極まらず、己の非を知って探捉するが則ち道也。嘆くまい喜びもしまい。とにかくに昨日は今日の昔であった(10-161)

＜仕事／文明観＞

・綺麗事では国は守れない

・好きになれ↓何事も本氣に成らねば役に立たざる也

・兵法は身を捨てて打つべし(1-45)

・大事の思案は軽くすべし(1-46)↓小事の思案は重くすべし

・何事も成らぬと云う事なし。一念起こると天地をも思いほかすもの也。成らぬと云う事なし(1-143)

- ・短氣にしては成らぬ事も有り、ここぞと思う時は手早くたるみなき様にしたるがよき也(1-67)
- ・本氣にて大業は成らず 氣違い死狂いするまでなり
- ・二つ二つの場にて早く死ぬほうに片付くばかりなり(1-2)
- ・分別は四請願に引き当て凡ゆる人を役に立つように
- ・少々は見逃し聞き逃しの有る故に下々は安穩する(1-25)↓水至りて清ければ魚棲ま
ず

- ・損さえすれば相手は無きもの也(1-26)
- ・まず種子は確かに握りて、さてよく熟する様にと修行する事は一生止まる事はなら
ず(1-59)

- ・決定の覚悟薄き時は、人に転ぜらるる事有り(1-86)
- ・皆人氣短か故に大事を成らず、仕損ずる事有り。いつまでもいつまでもとさえ思え
ば、しかも早く成るもの也(2-130)
- ・奉公人の至極は家老の座に直り、御異見申し上げる事に候。此眼さえ付き候へば、
余の事、捨てものなどは免し申し候(2-139)
- ・二六時中も工夫修行にて骨を折り(2-139)

△死生観▽

- ・武士たる者は生死を離れねば何事も役に立たず(1-47)
- ・武士は「命を惜しまぬ」に極まりたり(1-31)
- ・死に際の際のよき者は曲者也(1-125)
- ・毎朝毎夕改めては死に改めては死ぬ(1-2)
- ・只今がその時 その時が只今(2-47)
- ・必死の観念一日仕切りなるべし(1-132)
- ・凶に外れて死にたらば犬死氣違いなり恥にはならず(1-2)
- ・とかく氣違いにと極めて、身を捨てる片付くれば澄む也(1-93)
- ・見苦しき死をめされては無念の事に候(9-39)

△心構え△その他▽

- ・時は金也。泣き事を言っている暇はない。
- ・恥を与えては何しに直り申すべきや(1-4)
- ・翌日の事は前晚より案じ書きつけ置かれ候(1-18)
- ・七転び八起き(1-17)
- ・病氣などは氣持ちから重く成るもの也(1-28)↓病は氣から)
- ・人に出会い候時は、其人々の氣質を早く呑み込み、其々に応じて会釈あるべき(2-4)
- ・夢が正直の試し也(2-6)↓見ている夢に志は出る)
- ・志強く成り候ほど、夢の中の様子段々替わり申し候。有体の例は夢にて候。夢を相

手にして精を出だし候(2-86)

・ 結構者はすり下がり候、強みにてなければならぬもの也(2-11)

・ 端的ただ今の一念より外は之れ無く候。一念一念と重ねて一生也(2-17)

・ 時代の風と云うものは知られぬこと也(2-18)↓時代の流行りは自由に変えられない)

・ 武士は日ごろの心掛けが死後にまで現れ申すもの(2-27)

・ 今時の者無気力に候うは無事故にて候(2-28)↓無気力は甘い環境にいるから)

・ すべて人の交わりは飽く心の出て来ぬが肝要也(2-29)

・ 手紙一通も則ち向方にては掛物に成ると思いて嗜みて書くべき也(2-42)

・ 手本↓色々な人からそれぞれの良いところを手本とする(2-46)

・ 「只今が其時。其時が只今也」。二つに合点して居る故、其時に間に合わず(2-47)

↓・ 日頃の油断、今日の不覚悟を反省せよ

・ 時に応じ変に乗じ、詞(言葉)を掛くる勢いにて仕澄ます也↓詞の勢いが大切(2-48)

↓cf.2-126 軽き事には鳴り廻して澄ませたるがよし

・ 武道の方、御国家の事に難を申す衆候はば、愛想尽きて強かに申すべし。兼ねてより覚悟仕るべく候(2-70)

・ 当念に気を抜かず、上は手の理を見出すまで也(2-101)

・ 人事を云うは大なる失也。誉むるも似合わぬこと也(2-103)↓己の修行に集中して口

を慎め

・ 智慧の害に成る所也。何事も実でなければ、能持(長続き)なきもの也(2-106)

・ 自他の思い深く、人を憎み、似非仲などするは慈悲の少なき故也(2-108)

・ よき事も過ぐるは悪し(2-114)

・ 意地は内に有ると外に有るとの二つ也(2-120)

・ 小利口などにては物事澄まぬもの也。大きに見ねば成らず。是非の沙汰などむぎとすまじき事也。また、ぐなつきては成らず。切る所早く据わってつつ切れて、埒明かねば武士にてはなき也(2-121)

・ とかく酒の上にて理屈は違い申し候(2-123)

・ 軽き事には鳴り廻して澄ませたるがよし(2-126)↓軽い事は大声で収めてしまうがよい

・ 考え無しもの者ほど不憫なこと↓自分を良い者にして相手を悪者にするな(2-129)

・ 歌道の至極は身養生に極まり候由。端的の善行は朝起きに極まるべく候(2-163)↓

日の計は鶏鳴にあり)

・ 大業をする者はゆず(融通)がなければ成らざるもの也(2-166)↓大行は細瑾を顧みず↓小さな欠点や誤ちは見逃せ/聞き逃せ)cf.水清ければ魚棲まず

・ 其の長け相応相応にて害に成らざる分に了見し申し聞かすべき事也(2-160)

・ 病人は気を引き立つる事肝要也(2-142)

・ 物には相応不相応有り(2-136)

・ たとえご主人、傍輩の中に悪き事有りともそれに理屈をつけて褒めて置くまで也

(11-128)

・もの云いの肝要は言わざる事也(11-123↓沈黙は金)↓cf.口を慎め
・名将の御一言、裏を仰られる事も有るもの也(11-89)

・兵法など習うは無益也。目を塞ぎ一足なりとも踏込み打たねば役に立たざるもの也
(11-59)

・心を静むる事。唾呑み也。立腹の時も同前也。額に唾を付けるもよし(11-52)

・志は松の葉に包め(11-15)↓贈り物がささやかでも心を込めよ/志は見せるな(忍ぶ恋)

・一足も跡へ帰らず、直ぐに立ち向かうべし(11-18)

・口論の時心持の事。「随分尤も」と折れて見せ、さきに詞を尽くさせ、勝ちに乗りて
過言する時弱みを見て取り返りし、思うほど云うべし(11-10)

・始勝後戦は兼勝の二字に極まる(11-1)

・掛かるに待つを忘れず、待つに掛かるを忘れず(11-1)

・武士の前疑いは臆病の本と知るべし(11-2)↓深く考え込むな

・皮を切らせて骨を切る。無分別にならずば勝利なし(11-7)

・善と思う悪し。悪と思う善し。善悪ともに悪し。思わざる所善し(11-6)↓cf.男は私
欲を立てず 生死を離れるべし

・人中を避けて引つ込みたるは臆病者也。引つ込みて何事ぞよき事をするかと思えば
悪念ばかり也。たとえ引つ込みてよき事をするとも宗風を奮い起こして道を開く事は
なるべからず(10-147)

・人にはひたひたとして、さすが尾籠、緩怠もせぬ様に嗜み、表裏なきが人の本也
(10-144)

・天下を取る事は大気、勇氣、智慧がなければならず(10-143)

・士は不義を以て恥とす(10-121)

・あればあるなればなきに するがなる 苦の無き神の 宮移りかな(10-117)

・本心に分別が付きたる時、臆病者に成り候(10-84)

・始終の勝ちなど云う事は知らず。場を外さぬ所ばかりをし仕覚えたる(2-35)

・何事も皆偽りの世の中に、死ぬるばかりぞ誠なりける 常住死人なに成りたるを誠の
道に叶いたると云う也(10-56)

・古も今も変わらぬ世の中に 心の種を遺す言の葉(いつまで人の心の種残す 模範とな
るは「古今」の言葉)(10-42)

・礼儀の大意、始終は早く、中は静かに仕り候(10-8)

・世が末に成りたるとして、人々思いくたし、精を出さぬは無念の事に候。世に咎は無
づ(9-36)

・人の身に大切なるものは気味(気概)相也。命などは散りて行くもの也(8-43)

・人は四段有ると思う也。急々、急だらり、だらり急、だらりだらり也(7-43)↓4-50

・勇氣を御嗜み候へ。勇氣は心さえ付き候へば成る事にて候(7-40)

・我に勝つと云うは、氣を以て体に勝つ事也。兼ねて味方数万の士に、我に続く者無

き様に、我心身を仕成して置かねば敵に勝つ事はならぬ也(7-1)

・寝られぬ時は寝ず、寝らるる時寝る。食われぬ時は食わず、食わるる時食う(6-63)

・情け容赦なく物事を覆すのは、人の為にならない(6-63)

・柔和・慈悲心ばかりにて何として成るべきや、大勇氣なくして駆け入らるべからず

(6-21)

・一方向きにてなければ益に立たぬもの也(6-21)

・武士たる者は、忠と孝とを片荷にし、勇氣と慈悲心とを片荷にして、二六時中肩の

割り入るほど荷いてさえ居れば、侍は立つなり(6-21)

・たまたま人間に生まれ、思い出無くて死なん事は無念也。いざ天下を取るべし

(6-16)

・馬に乗りたると存ぜず、畳の上に座し候心持ちにて候へば、少しも草臥れ申さず候

(5-116→岩波 5-66)

・「機嫌はよござ」(5-82→岩波 5-31)

・小身成る者ほど元を忘れ申しまじく候。また、後を前に心得候事專一に候(4-65)

・もの毎好きの者は集まるものなり(4-55)

一、家中によき者出で来候様

一、家中の者当てがいを取り失い申さざる様

一、家中に病者出で来申さざる様(4-25)

・武士たる者は二十八枚の齒を悉く噛み折らねば物事埒明かず(4-21)

・臆病魂一つ足り申さず候(4-8)

・油断すれば必ず落度有るもの也(3-49)

・我氣に入らぬ事が我為に成るもの也(3-41)

・当時氣味よき事は必ず後に悔やむ事有るもの也(3-34)

・時節到来と思わば潔く崩したるがよき也。その時は抱え留まる事も有り(3-27)

・義理ほど感深きものはなし(3-1)

・第一口を慎むべし(2-132)

・恥を与えては何しに直り申すべきや(1-14)

●葉隠から会得したこと

・心も体も引き締め(垂直)、広げる(水平)↓うどんに強い腰を出すように↓cf.「我と汝」マルティン・ブーバー。宇宙、造化、中庸、知仁勇、仁愛、生命の本質(器量と戦い、機鋒)を志向する≡生きる目的

・義より上に道(宇宙の実相≡陰陽の運行・循環↓易经)はある↓高み(垂直)を仰ぎ、

私欲は軽く(1-44、1-163 一和天道、1-164 何事も人より一段立上がりて見ねばならず、

1-169 本筋さえ踏み外さぬ様、1-178 大氣は大慈悲、4-65 元を忘れず前後を忘れず、

・人間の使命は、「知仁勇の断行/具現化」であり「魂を磨き続けること」である↓愛/

仁は「自己の眞の具現化」であり、「信じ待ち赦す心」(1-136 義の上にある道の慈悲、

「1-98」であり、「自己犠牲(命を捧げ尽くすこと)である。魂とは、宇宙の造化の分霊である。

・人は立ち上がる所がなければものにならず。兵法は身を捨てて打つべし(1-45、1-47、1-140)。その為の覚悟が、「武士道といふは死ぬ事と見附けたり(1-2、1-13、1-18、1-47、1-131)」「二つ二つの場にて、早く死ぬほうに片付くばかりなり(1-2、1-12)」「図に当たらぬは犬死などといふ事は、上方風の打ち上りたる武道なるべし(1-2)」「毎朝毎夕、改めては死に改めては死ぬ(1-2)」「恋の至極は、忍恋と見立て申し候(2-2、2-33)」「一生忍んで、思い死にする事こそ恋の本意なれ(2-2、1-96)」「本気にては大業はならず、氣違ひになりて死に狂ひするまでなり(1-14、1-17、1-93、2-22 死狂つゝ、2-35、2-117、2-130、2-133、4-21)」「不仕合せの時、草臥るる者は益に立たざるなり(2-1、1-73、1-84、1-92、1-127、1-174、2-138、2-133、7-46)」「必死の観念、一日仕切りなるべし(1-132、3-49)」「同じ人間が、誰に劣り申すべきや/何ぞ人が人に劣るべきや(序文、1-30 気概、1-83、1-116、1-117、1-120、1-141、142、143、1-161、162、2-32)」「何事も成らぬと云う事なし(1-141、142、143)→cf.「為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成さぬは人の為さぬなりけり(上杉鷹山)」

・結局、人間は自らが創ったものとなる。

さて、これらの言葉を厳選して「生命燃焼の八側面」に配置していくわけだが、それは次回以降のお楽しみに。：私だけが楽しんでいるみたいで大変恐縮。

今月も健康と健闘を。